

簡便な心理評価（セルフ・アンカリングスケール）の試用

主観評価を中心に、“つながり感”と生きがい感を意識して

所属先施設名：医療法人六峯会 介護老人保健施設グリーンピース 通所リハ
発表者氏名：木下 裕介（作業療法士）

キーワード： 心理評価 生きがい感 セルフ・アンカリングスケール

【はじめに】昨年、社会的結合感(“つながり感”)の向上が、QOL 向上に有効と考え、QOL は近藤式生きがい感スケール(以下K-2式)、つながり感 は UCLA 孤独感尺度日本語版の点数を指標に、関わった結果を報告した。3例とも、生きがい感とつながり感に関係性がうかがえたが、多項目の心理評価には時間を要した。今回、セルフ・アンカリングスケール(以下セ・スケール)を用い、つながり感と生きがい感を簡便に意識することを試みた。

【具体的取り組み】作業活動と心理評価、研究報告への同意が行えた利用者4名(平均年齢78.5才、HDS-R平均16.3点)が対象。「孤独感が高い」=「つながり感」が低いと捉え、対象者の“つながり”が強まるよう、環境調整も含め関わりながら、介入前後で、生きがい感と孤独感、自尊感情をセ・スケールで測定した。他方、記述式のとつながりチェック表(自作、10項目)への回答と、主観評価の補足を目的とし、K-2式(27項目)から、3因子構造(①「社会適応感と満足」、②「意欲と達成」、③「やすらぎ」)と通所リハが関われそうな項目を残した通所リハ用“短縮版”の試作も検討した。

今回用いたセ・スケールとは、
Cantril(1965)によって作成され、
右図のように11段のハシゴ状の図形を示し、

「あなたのBest Lifeを10、
Worst Lifeを0とするなら
現在のあなたは何段目くらい
だと思いますか」という問いに回答する様式の調査である。

10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

【成果と効果】3か月後セ・スケールにおいて、4名中3名は孤独感は維持されており、その3名は生きがい感も維持・向上していた。3名中、自尊感情低下は2名、1名は変化がなかった。孤独感が増悪していた1名の方は、生きがい感にも低下がみられた。自尊感情には変化がなかった。つながりチェック表では、家族に関する記述がほとんどであった。仮に選択したK-2式“短縮版”用の13項目は、全体では元のK-2式の結果と高い相関は保っていた($r>0.95$ $p=0.05$)。しかし、第1因子・第3因子の合計とつながり感、第2因子と自尊感情との相関については、有意水準以下であった。

【まとめと考察】今回、実際にセ・スケールを使用し、所要時間の短さが実感できた。前回報告同様、家人との関係性が利用者の心理に影響すること、社会的結合感が生きがい感に影響を及ぼす可能性がうかがえた。

K-2式“短縮版”用に選択した13項目(3因子構造)からは、生きがい感の構成因子と、個々の心理評価との相関は今回認められなかった。しかし、元のスケールとの相関は高く、各項目の回答結果を具体的なアプローチを検討するため利用したい。対象数を増やしながら、“短縮版”の試用を続け、社会的結合(つながり)感と「社会適応感と満足」、「やすらぎ」、自尊感情と「意欲と達成」の関係が明確になれば、利用者の心理状態把握、アプローチの検討に役立つのではないかと。今後も主観評価に基づき、家人とのつながり感の向上に資するよう、日々の活動の結果である作品の展示方法の工夫や、活動を周知し易くするアルバム作成、連絡帳記載の充実等アプローチの拡充もはかっていきたい。